花田比露思著

花田比露思歌集第一卷
あけび叢書第百五十九卷

歌集

雜草路

短歌新聞社

歌集 雑草路（あらくさみち）

平成８年10月10日　初版発行

著　者　花田比露思
編集者　林　光　雄
〒154 東京都世田谷区弦巻1-24-19
発行人　石黒清介
印　刷　㈱キャップス
発行所　短歌新聞社
〒166 東京都杉並区高円寺南4-43-9
振替口座 東京00150-4-21683
電　話　０３(3312)９１８５

定価 3,500円（本体 3,398円）

花田先生のこと

花田大五郎先生が比露思の名で、大正年代から昭和にわたり、昨年夏御逝去に至るまで「あけび」の主宰者として、多くの後進の指導に当られ、御自身また優れた作品を残されたことについては、私どもの申すまでもないことである。

先生の名を私が初めて知ったのは、あの大正七年、私が大学を出て間もなく、たまたま郡長をしていた富山県の一漁村の主婦たちの間に起った米騒動の火が、忽ちにして阪神の中心地に燃え移ったときのことである。今日では考えられないことであるが、そのころ大阪朝日新聞

の社会面の記事に「白虹、日を貫く」の文字があったのを理由に、時の寺内内閣は不敬罪ないし朝憲紊乱の罪をもって脅かし、大朝に弾圧を加えた。その結果、編集局長鳥居素川・社会部長長谷川如是閑・政治部長大山郁夫・通信部長丸山幹治等とともに、調査部長であった花田先生も連袂辞職し、社を去った。ただちに先生は丸山とともに「大正日日新聞」を発行（不幸にして短命に終った）すると同時に、長谷川・大山らが創刊し、大正デモクラシーやわが国社会思想の啓蒙的役割を果した雑誌「我等」の歌壇の主任として、それに協力されたと記憶する。

これによっても分るように、明治時代に学業を了え、まさに日本帝国興隆の時期に当って、先生が日本の将来

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

に何を期待し、何を考えていたか、それはむしろ終戦後の現在に直結するものがあったと思う。しかも、先生はそれを実行する勇気と熱情を、一見素朴な自然の風貌の裡に蔵していた。

私がそうした先生の風貌に接するようになったのは、終戦後、おなじく大学教育の関係者、担当者としてであった。それより以前、戦時中、和歌山高商の校長として令名があったことは承知していたが、戦後、福岡商科大学学長、さらに大分大学学長のころにわたって時に会議において席を同じうすることがあった。何と言っても、戦後日本の教育改革において、学問の自由と大学の自治を守ることは、大学の運営に当る者に課せられた重要な任務であった。われわれが「国立大学協会」を設

立し、また国公私立をふくめて「全国大学教授連合」を結成したのは、いずれも大学および大学人共同の組織と力を、そのために必要としたからである。

占領下、司令部の助言や勧告には、その担当者や係官によって、時に干渉がましいことがないではなかった。それは中央においてよりも、地方において多くあったようである。昭和二十四五年のころであったが、九州・中国地区の「大学教育協議会」が福岡で開かれたときのことである。司令部側からはドイツ占領下の教育担当者として敏腕を伝えられたアデー氏を団長とする若干のアメリカの専門家が列席し、同地区の大学関係者等との間に、教育・研究から学生指導、財政等、大学行政全般にわたって協議が行なわれた。それには司令部側の相当

一方的・強制的な指示があった。そのとき、花田学長がひとり立って、それを批判・抗議したために、以後は司令部側のこの種の意見は単に日本側の参考にとどめることになったという。

この挿話は、その会議に出席していた当時の九州大学総長菊池勇夫氏から直接聞いたところであって、平素寡黙な花田先生だけに、その発言には千鈞の重味があったことであろう。尤も、その背景には次のような事情もあったかと想われる。花田先生が戦前、和歌山高商の校長であったとき、外人教師として来ていたニューゼン氏が、奇遇にも、終戦後、連合軍司令部の民間情報教育局長の要職に就いていたので、彼は旧校長に対する恩誼を忘れず、かねて好意と尊敬を払って来たことが部内に

も知れていたのであった。

かようにして、学問・教育、否およそ人間の自由と独立を尊重して已まなかった先生の生涯において、最も心を痛めた時代は、満州事変以来のファッショ的全体主義と軍国主義の時期であったと想像するに難くはない。短歌をもって生の表現、生活の記録と考えられていた先生には「さんげ」以後、歌集にまとめていないけれども、この時代の作歌について、その跡をたどるならば、必ずやその間の消息を知ることができるであろう。さらに、戦後、われわれの共に関与したわが国の教育改革の理念が、二十年後の今日、果してそのごとく実現しつつあるのか、祖国の将来にふたたび不安と危険の兆候はないであろうか。教育者花田大五郎が歌人花田比露思と同

一人であるかぎり、戦後の作品にもそれを読み取り得るものがある筈である。私は同門の方によって、そうした方面の研究がなされることを期待して已まない。

昭和四十三年初冬

南原　繁

歌集雑草路総目次

序……南原　繁
大正十年……一三
短　歌（五十一首）
大正十一年……二七
短　歌（八十四首）
大正十二年……四五
短　歌（百六十二首）
長　歌（二首並に反歌四首）
旋頭歌（二首）
詩　（一篇）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

大正十三年……七九
短　歌（二百九首）
長　歌（二首並に反歌五首）
大正十四年……一二一
短　歌（六十五首）
大正十五年……一三七
短　歌（五十一首）
昭和二年……一四九
短　歌（八十六首）
長　歌（二首並に反歌三首）
昭和三年……一七一
短　歌（百三十三首）
長　歌（二首並に反歌二首）

旋頭歌（五首）
昭和四年……二〇五
短　歌（二百二十八首）
昭和五年……二四五
短　歌（百六十一首）
昭和六年……二七九
短　歌（二百二十九首）
短　歌……千四百五十九首
長　歌……八首
反　歌……十四首
旋頭歌……七首
詩　……一篇
あとがき……林　光雄　三二一

雑草路

大正十年

短　歌……五十一首

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com